
終わりの1時間前

緒方 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりの1時間前

【Nコード】

N5679A

【作者名】

緒方 純

【あらすじ】

大学生の信吾は、学生寮の屋上でタバコを吸うことを好んでいる。

キャスターの煙は、やがて雲と結合して、ニコチンとタールに侵された雨粒を降らすのではないだろうか？

そんな仮説を証明したいわけではないが、僕は学生寮の屋上で、雲に向かって延々とキャスターの煙を吐き放っていた。しかし濁った雲の色は、高校生の頃の、禁煙指導の際に見せられた、喫煙者の肺を連想させ、僕の仮説も強ち的外れではないのではないか、と期待させる。

「そして世界中の動物たちは癌になって死んでしまいましたとさ。めでたし、めでたし。ってか？」

いつの間にか信吾が居て、信吾曰くの、僕のご都合妄想を、いつものように嘲っていた。

そういえば、初めて東京に遊びに行った時も、渋谷の八千公の傍の、ぎゅつぎゅつに喫煙者が押し込まれた喫煙スペースを見て、

「これじゃあ、ご主人様が帰ってくる前に、八千公は癌で死んじゃまうな」

と信吾はさっきの様に嘲っていた。僕は八千公が死んで渋谷から消えたら、109もスクランブル交差点もギャル男もみんな消えてしまつて、宇宙から東京都を眺めたら、渋谷区が在る場所だけ欠けてしまっているんじゃないか、と考えたが、これも信吾に言わせれば、ご都合妄想らしい。

急に風が強まってきた。僕が雲にキャスターの煙を放とうとしても、煙が僕の口と鼻の穴から顔を出した瞬間に風が攫って行ってしまふ。

「どうして煙だけ・・・」

「もうすぐ雨が降る。良い子ちゃんが雨に濡れて癌にならないように、風が雲の上まで連れてってくれるんだ。」

信吾はまた嘲てみせた。

「俺だって今までずっと良い子ちゃんだっただろ？」

問いかけてみたら、背後から岩崎洋子の声が聞こえた。

「ずっと良い子ちゃんだったから、不良になってみたかったんだよね？」

僕の席の後ろだった岩崎は、僕の耳元で囁いた。僕が後ろを振り返って見た岩崎の表情は、あたしは何でも分かっていると云わんばかりの、彼女特有の嘲笑だった。

高校受験を控えた中学3年生の3学期の2日目。僕は自宅を出た後、行方不明になった。そして夜になって公園でポツンと佇んでいたところを、先生方に発見され、保護されてしまった。

しかし僕は岩崎の言うような、不良になりたかったわけではない。担任だった福原先生が、

「信吾はおかしくなった」

と、僕が居ない時に、クラスのみんなに話していたそうで、それ

をクラスメイト経由で聞いた時は、只々悲しかったが、今にして思えば福原先生の仰るとおりで、というよりも僕は物心ついた時から変だった。たぶん、物心つかない時も変だったのだと思う。

気づいたらキャスターを20本吸い尽くしていた。それでも箱の奥に1本隠れてやしないかと覗いてみたが、やはり吸い尽くしていた。

「タバコ買ってくる」

「早く戻って来いよ」

僕がわざわざ数十段の階段を上って、また屋上にやってくると確信して嘲っている信吾が憎たらしかった。

「もう此処には来ないよ。優しすぎるんだ。此処も、おまえも」

屋上から出ようとした時、背後で雨の打つ音がして、僕は少し憂鬱になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5679a/>

終わりの1時間前

2010年11月17日14時37分発行